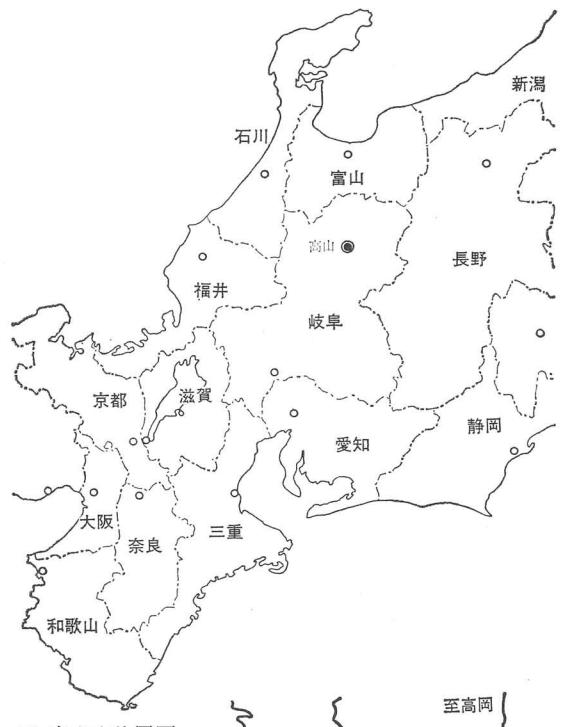


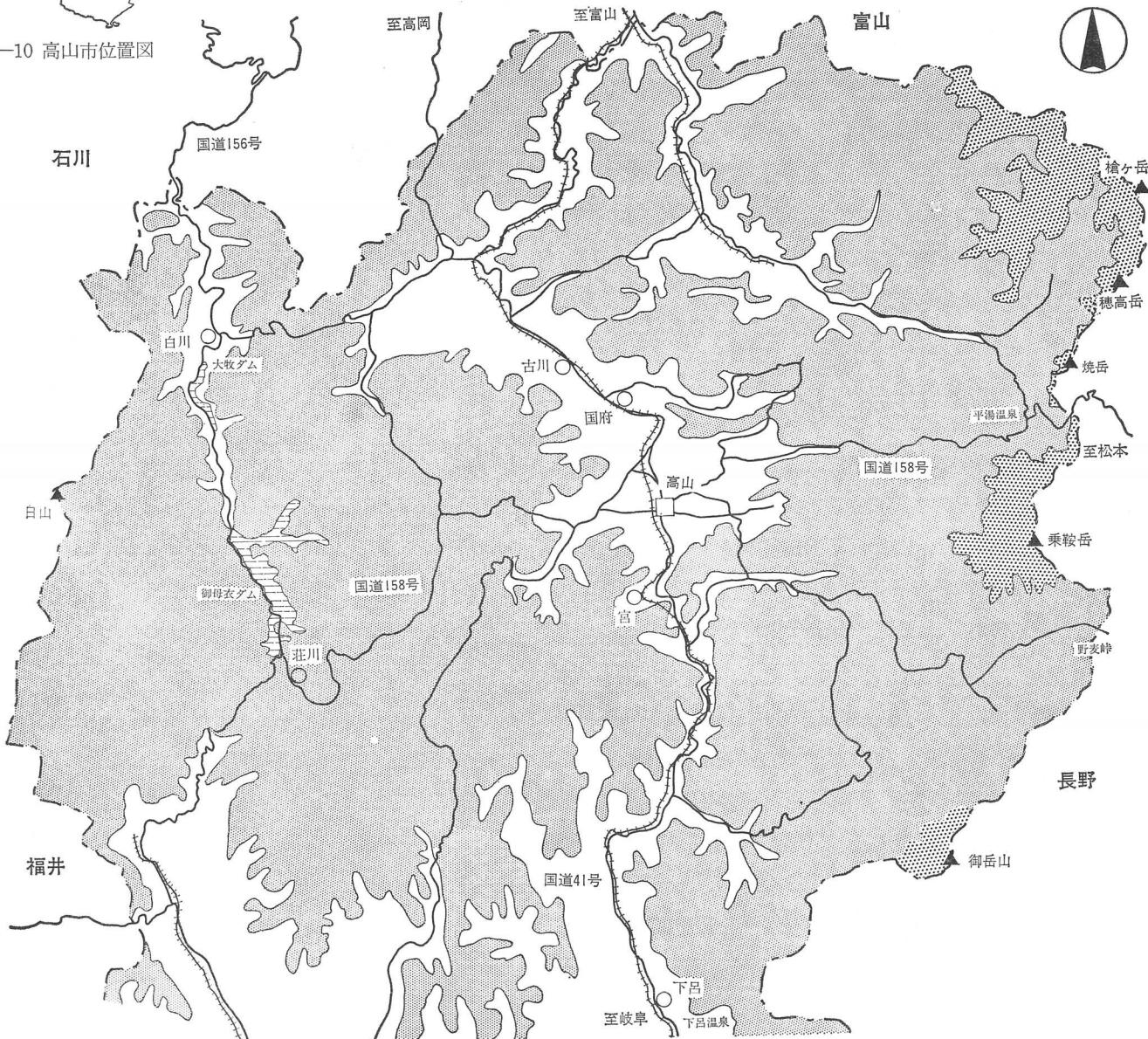
第二節 高山の現況



1-10 高山市位置図

位置 高山市は、東に乗鞍・穂高の北アルプス連峰を眺め、西に白山をのぞむ飛驒のほぼ中央にある。宮川沿いにひろがる高山盆地、川上川沿いにひろがる上枝盆地、大八賀川沿いの平地などの海拔540m～600mのところに市街地と集落があり、江名子などの丘陵地帯、海拔600m～650mにも集落が点在する。その他は山地で集落はない。土地形成の中心となる河川は、宮川を主流として西に川上川・苔川、東に江名子川・大八賀川が流れる。北の国府町との境に小八賀川が流れる。宮川は富山県に入って神通川に注ぐ。

人口と産業 高山市的人口は約6万人で、ここ10年間、自然増加と周辺農村からの転入者とで、わずかずつ増えている。就業人口は約3万人で、第一次産業が減少し、第二次・第三次産業の比重が高まる傾向が見られる。昭和45年には、就業人口のうち16.3%が第一次産業、33.8%が第二次産業、49.9%が第三次産業と、比較的第三次産業の比率が高い（1-12・1-13参照）。



1-11 飛驒地方と高山

第一次産業のうち農業についてみると、農家人口のうち、若中年層は、第二次・第三次産業の成長によって、第二次・第三次産業へ移る傾向がある。主な農産物は、昭和46年に米4,300t、野菜・果物5,800tで、繭は21,640kg生産した。野菜・果物のうち白菜・大根・ほうれん草・かぶ・馬鈴薯の生産が多く、白菜・ほうれん草は中京・阪神方面へ出荷する。

飛驒一円の森林資源は高山の木工業を支えている。第二次産業のうち工業についてみると木工加工業が中心を占めている。市の工業生産の60%が木工加工業によっている。木製家具が最も多く、その他に春慶塗・一位一刀彫など、伝統的な技術を生かした木工業がある。

第三次産業のうち、商業は飛驒一円の中心都市として発展してきている。市内店舗数は約2,000で、従業員は7,500人、就業人口の25%にあたる。近年は観光関係の店舗が増える傾向にある。商業地域は、三町筋・安川通および宮川以西の本町筋など2群あり、宮川をはさんで連続している。

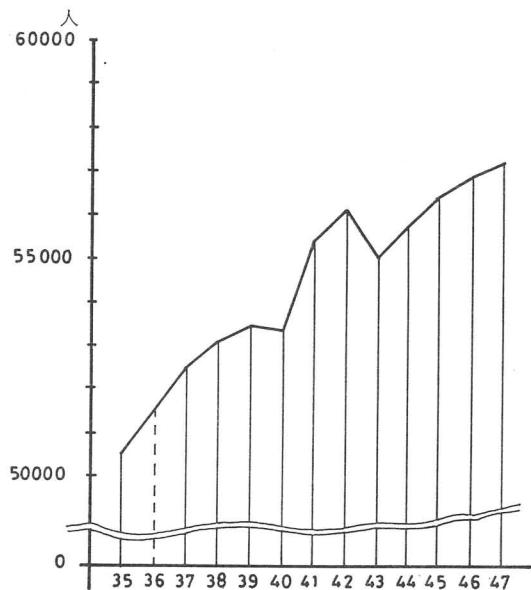
觀光 高山への観光客は、昭和47年に約140万人で増加する傾向にあり、観光は高山の産業・地域計画などに大きな影響を与えていている。昭和43年に策定された高山市総合計画書によれば、高山市の未来像を「産業観光都市」と定め、高山の観光の方向を次のように述べている。

古い伝統と風俗にまもられた飛驒高山は、将来健全な観光の町として発展する要件を充足している。しかし、観光発展に性急のあまり、本来その魅力である美しい自然、貴重な文化財、床しい風習が破壊され、保全に万全が期されないならば、遠からず「飛驒高山」は単なる「高山市」でしかなくなることはあきらかである。高山市が「山も水も美しい」そして「人の心も美しい」町として、これらのすぐれた観光資源を保全しつつ、「観光飛驒高山」の発展を期す「昔と今」が隣り合わせに調和された姿で息づいている町高山を、守り、育てるのは、すべて高山市民の一人一人の心と努力にかかっている。

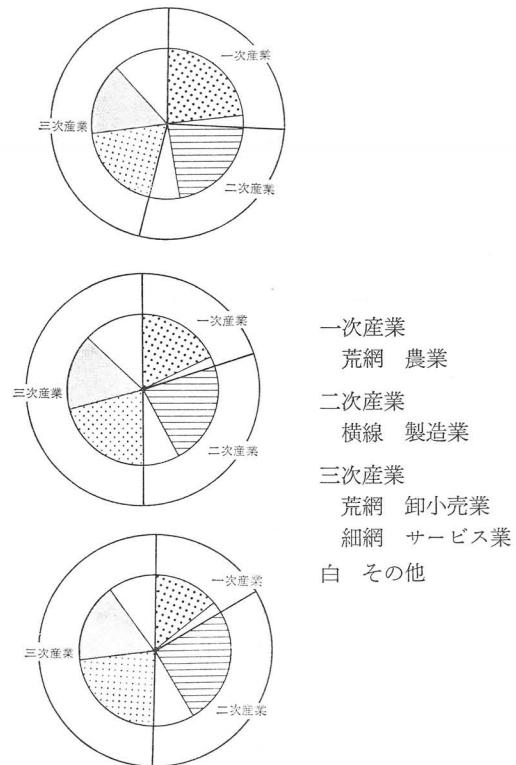
また、

高山祭をはじめ多くの文化財と古い伝統を維持している高山市は、観光にその発展のウェートを多くかける必要があるが、そのためには、市民の生活の中に息づく観光資源に対する愛着と誇りを保全整備の方向へとすすめ、周囲をとりまく大自然の整備保全にあわせて、我が国における最大級の健全なレクリエーション・ゾーンとして必要な施設の開発が、重点的かつ計画的になされなければならない。

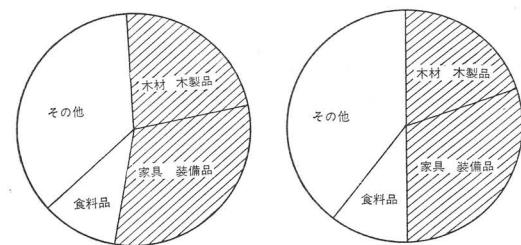
ところで、高山の観光は昭和30年代前半頃まで、主として春秋の高山祭に限られ、乗鞍登山・飛驒白川へのターミナル的色彩が強かった。昭和38年「くらしの手帖」に「山のむこうの町」として、高山が紹介された頃から、飛驒・民芸・小京都という高山のイメージ



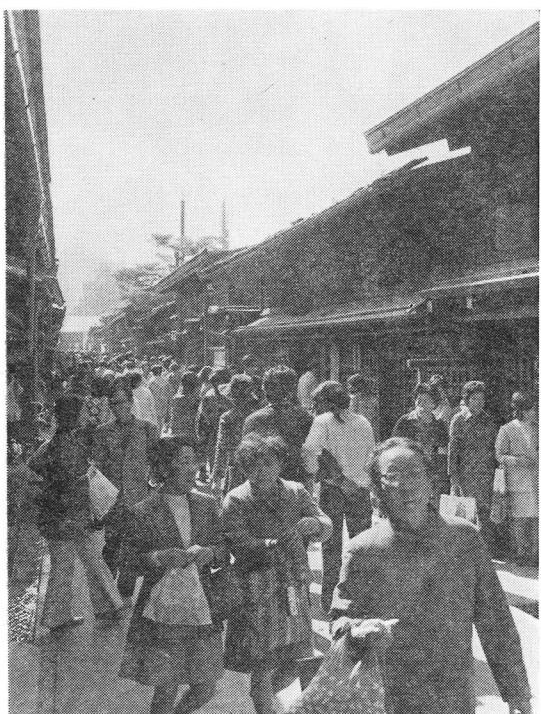
1-12 高山の人口（昭和35年—昭和47年）



1-13 産業別人口（上から昭和35年 同40年 同45年）



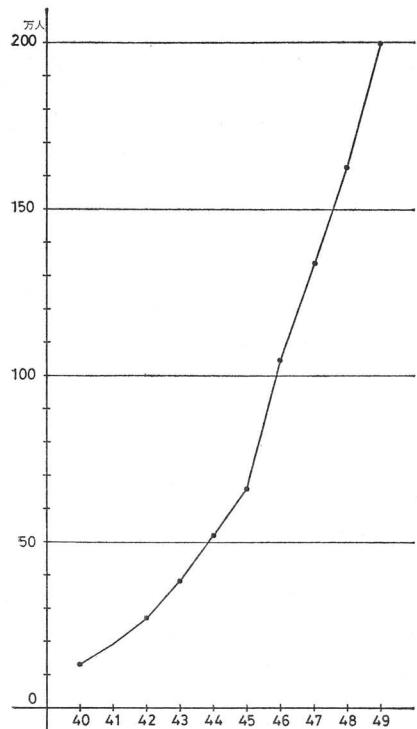
1-14 昭和46年工業内訳 左 従業員 右 出荷額



1-15 観光客でにぎわう町並



1-16 屋台会館へ向う観光客



1-17 高山への観光客動向 (昭和40年—昭和49年)

が定着し始め、観光客が目立ってくる。東海道新幹線開通、国道41号線の整備の時期とも重なって、観光客の数は次第に増加する。

高山の観光を通年観光にしたいという市の構想は、昭和30年代中頃からあり、いくつかの観光施設を設けた。昭和34年には、合掌造の民家を移築し、飛驒民俗資料館とし、後には付近の農家も移築して充実し、飛驒という山国の人情を伺い知る恰好の施設となった。昭和46年には飛驒一円の民家を10数棟移築して、「飛驒の里」をつくり、民俗資料館と併せて民俗村とした。もうひとつ、高山に行くと必ず訪れる観光施設に昭和43年に開館した高山屋台会館がある。祭と屋台については次節にのべる。

観光客の増加に伴い、旅館・みやげ物店も増加している。旅館・民宿は現在170軒で6,000人を収容でき、少しづつ増加している。3年程前までは40軒足らずだったみやげ物店は今では130軒程になりここ2・3年で急増している。みやげ物は地元高山・飛驒の手作りのものが多く、高山のイメージと合っているので好評である。みやげ物には木工製品、農産物の加工品などが多いので、観光客の増加は、観光客を直接の対象にする旅館・みやげ物店以外の工業・農業にも好影響を及ぼしている。第一次・第二次・第三次産業のそれが今のことろうまく係わりあいながら発展していると言えよう。

観光客の増加は、一方では汚物・騒音などのいわゆる観光公害と言われる問題を引起す。また、観光客相手の経営者と、その他の住民との間には、それぞれ「金が入る」「迷惑なだけだ」という意見の対立があり、今後に問題を残している。

交通 高山の現況のうち、主要道路網についてまとめておく。幹線道路は南北に国道41号線・同バイパス、東西に国道158号線が通る。国道41号線は国鉄高山本線とともに、高山と東海・北陸を結ぶ動脈である。そのため、高山を通り抜けるだけの通過交通が多い。昭和47年に、市街地から西へ離れて高山バイパスが開通し、通過交通はバイパスを利用すればよくなつた。

国道41号線と国道158号線は市街地で交叉する。国道158号線は、東へは丹生川村から長野県松本市に至り、西へは莊川村・白川村に至る。すなわち高山と東西の山間部とを結ぶ道路であり、もともとは生活道路である。けれども近年では、東の乗鞍・平湯、西の飛驒白川などと高山とを結ぶ観光道路としての整備も進んでいる。